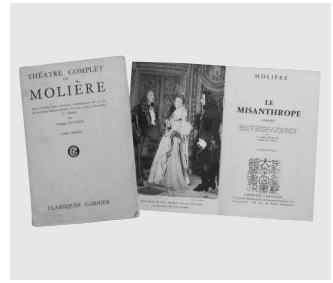


# 佛蘭西書巡覧 16

平山 弓月

エッセルマンに據れば、ゲエテは此の『厭世家(ミザントロブ)』を世にも懐かしい書物として絶えず愛讀してゐたさうである。わたしはゲエテが此の書を枕頭書(リイヴルド・シュヴェ)の一つに數へた事は甚だ當然だと思ふ。

辰野 隆『仏蘭西文學下』



お芝居の話をしましょう。「演劇」と言えば、少し硬い話のように聞こえますが、フランスの人々は、映画と並び、日常的によく劇場へと足を運びます。パリはもちろんですが、地方の都市にでも劇場がたくさんあり、古いも若きも、男性も女性もお芝居見物を楽しみにしているようです。

フランス古典演劇が完成されたのは、17世紀のことでした。ピエール・コルネイユ *Pierre Corneille*(1606-1684)、ジャン・ラシーヌ *Jean Racine*(1639-1699)、モリエール *Molière*(1622-1673)の3人の名前を挙げられるでしょう。前二者は悲劇を、そして後者は喜劇を完成させました。詩などの「言語芸術」は、もともとさまざまな制約を受けるのですが、劇作にも制約がありました。その一番大切なのは、「三一一致(さんいっち)の法則」と呼ばれるもので、劇の中で流れる時間は一日で、場所は転換せず同一で、筋書きは単一でなければならないという制約でした。また台詞は基本的には「韻文」で書かれなければなりません。つまり劇作品は観るのもよし声に出して読むのもよしといったものなのです。美しいフランス語に満ち溢れています。

本稿では、上記三人のうちモリエールを取り上げたいと思います。自ら役者でもあった彼は、本名をジャン=バチスト・ポ克蘭 *Jean-Baptiste Poquelin*といい、パリの豊かな商家に生まれ、大学で法学士の学位まで取りながら、周囲の期待を裏切り「役者」になると宣言し「盛名劇団」という一座を立ちあげます。立派なのは名前だけで、興業は成功せず一座は解散の憂き目を見ることとなります。彼はその後仲間たちと旅一座を結成し、さまざまに苦労を重ねますが、そうする中からモリエールは「喜劇作者」としての想像力を育ててゆきます。

それまでのフランスの喜劇は、中世のファルス、艶笑譚を元にした下世話な一幕物や、イタリアの即興劇をまねたものばかりでしたが、パリにもどったモリエールは、自らの経験や透徹した人間観察を基にした傑作を次々と上演し好評を得、劇作家として成功を収めることとなります。

彼の本領は「風俗風刺」や「社会批判」にあ

りました。矢継ぎ早に上演された作品には「才女気取り」*Les Précieuses ridicules*(59)、「タルチュフ」*Tartuffe*(64)、「ドン・ジュアン」*Don Juan*(65)、「ル・ミザントロブ」*Le misanthrope*(66)、「守銭奴」*L'Avare*(68)、「町人貴族」*Le Bourgeois gentilhomme*(69)、「スカパンの悪だくみ」*Les Fourberies de Scapin*(71)、「女学者」*Les Femmes savantes*(72)と傑作にいとまがありません。どれも私たちの中に見出せる「性格」を見事に浮き立たせた典型的「人物」が現れます。偽善者のタルチュフ、放蕩貴族のドン・ジュアン、人間嫌いのアルセスト、守銭奴のアルパゴンなどは、現代でも典型的な人物像として、人々の言葉の中に出ることがあります。

Je veux qu' on soit sincère, et qu' en homme d' honneur

On ne lâche aucun mot qui ne parte du cœur.

自分の気持ちに正直になれって言ってるんだ。立派な人間なら、心にもないことはひとことも口にしないんだ。

(秋山伸子訳)

と、寛容で世故にたけた親友フィラントを潔癖で厭世家のアルセストは非難しますが、アルセスト自身は、若くて華美な未亡人のセリメーヌに恋をしているのです。彼女は彼が最も嫌う、心ない愛嬌、コケットリイを周囲のものたちに惜しげもなく振りまきます。そんな彼女に対する思いは、フィラントが指摘するまでもなく、矛盾に満ち溢れています。しかし「恋する者は」それをどうする事も出来ないのです。私たちの周囲にも容易に見られる男女の関係ではないでしょうか。ここに芝居を観るもの、作品を読む者の「笑い」の源泉があるといえます。

しかしこの「笑い」は、下卑た一過性のものではなく、深く私たちの胸に心に突き刺さる「笑い」なのです。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)